Ⅰ　研究の概要

（１）主題設定の理由

１　研究主題

「人とのかかわりを大切にして、豊かな心を育てる道徳教育」

２　主題設定の理由

本校生徒は明るく素直で、学校行事などに積極的に取り組む姿勢が見られる。しかし、一方では、授業に無気力であったり、私語をしたりするなどの実態も見られる。特に、本校の課題として生徒同士のつながりの希薄さがあげられる。人間関係が表面的で脆弱なことから、弱いものいじめや、不登校などに問題が拡大することもある。

このような課題の解決には、存在感と自己実現の喜びを味わうことのできる場を創造して、生徒が安心して自分の力を発揮できるようにすることが必要である。生徒同士の望ましい人間関係や教師との信頼関係をはぐくみ、生徒一人ひとりが安心して生活できる学級の集団をつくることが不可欠である。

そのために、道徳の時間を要として、全教育活動を通じ「人とのかかわり」に焦点化した心の教育を教科・領域等との組織的・計画的な関連を図りながら実践することを主眼として、「人とのかかわりを大切にして、豊かな心を育てる道徳教育」を研究主題とした。

３　研究の目標

共感する力や思いやりの心、協力し合う態度を育て、集団や社会の一員としての自覚と責任をはぐくむ道徳教育の充実を図ることにより、豊かな心をもち、人とのかかわりを大切にして、これからの社会をたくましく歩む生徒を育成する。

４　研究の仮説

心の居場所として、生徒一人ひとりが安心して生活できる学級集団をつくり、道徳の時間を要として、全教育活動を通じ「人とのかかわり」に焦点化した心の教育を教科・領域等との組織的・計画的な関連を図りながら実践すれば、共感する力や思いやりの心、協力し合う態度を育て、集団や社会の一員としての自覚と責任をはぐくむことができる。

５　研究の内容

①生徒同士の好ましい人間関係や生徒と教師との信頼関係が確立された学級経営を確立し、道徳の時間を要として、全教育活動を通じ「人とのかかわり」に焦点化した心の教育を教科・領域等との組織的・計画的な関連を図りながら実践する研究。

②多様な道徳教育用教材の選択・開発とその効果的な活用をはかり、特別活動における実践活動や体験活動などにおける道徳的実践や各教科等における道徳教育と道徳の時間との関連的な指導を工夫する研究。

③道徳教育推進教師を中心とした全校指導体制の在り方を見直し、指導体制や家庭・地域等との連携体制の充実をはかる研究。

（２）研究組織及び年間研究推進計画

１　研究組織

「人とのかかわりを大切にして、豊かな心を育てる道徳教育」

校内推進委員会

校長、教頭、教務主任、研究主任、各学年道徳担当１名（計８名）

＊研究部会（教頭、研究主任、各学年道徳担当）

＊道徳教育推進教師＝研究主任

外部アドバイザー

全　体　会

授業研究部会（１年、２年、３年、特支）

啓発部会（４年部・道徳担当・特別活動部）

２　研究年間推進計画

学期	月	校　内　研　究　・　研　修　内　容
1	4	研究主題の決定、研究推進体制検討、研究推進委員会
	5	各部会、全体研究会
	6	全体研究会
	7	
	8	全体研修会
2	9	授業研究会（随時）
	１０	研究推進委員会　※　各学年で１回の研究授業
	１１	各部会、全体研究会
	１２	
3	1	研究推進委員会
	2	各部会、全体研究会、１年間のまとめと反省
	3	次年度研修計画の検討

（３）期待される研究成果と検証の方法

１　期待される研究成果

道徳の時間を要として、全教育活動を通じ「人とのかかわり」に焦点化した心の教育を教科・領域等との組織的・計画的な関連を図ることにより行う。共感する力や思いやりの心、協力し合う態度を育て、集団や社会の一員としての自覚と責任をはぐくむ。

《過去５カ年の研究主題》

①平成１８年度『総合的な学習の時間の創造』

②平成１９年度『確かな学力の育成と豊かな心を育む指導の充実を目指して』

③平成２０年度『確かな学力の育成と豊かな心を育む指導の充実を目指して』

④平成２１年度『生徒のやる気を引き出し、確かな学力の定着をめざす授業改善』

⑤平成２２年度『生徒のやる気を引き出し、確かな学力の定着をめざす授業改善』

《指定研究歴》

指定者	指定内容	研　究　主　題	指定年度
文部省	道徳教育推進指定	豊かな心を育て、実践力を高める道徳教育	平成元、２年度
県教委	学校保健推進指定	心豊かで、たくましく生きる生徒の育成	平成７、８年度
県教委	中学校教育課程指定	生きる力を育む授業の創造	平成 11、12 年度
文科省	道徳教育総合支援事業	人とのかかわりを大切にして、豊かな心を育てる道徳教育	平成 23、24 年度

２　検証の方法

道徳の時間のようすを授業者が「生徒が共感的に資料を読み取っていたか」「生徒が積極的に発言していたか」「他の生徒の発言をしっかり聞いていたか」「多様な考え、中心発問に迫る考えが出たか」の４観点で自己評価する。研究が進展するにつれて評価ポイントが向上することで、ねらいとする道徳的価値に迫れる授業が達成されたかを検証する。また、生徒会が自主的な参加を呼びかける「ちょボラ」（ちょっとしたボランティア）の参加人数が増加したり、あいさつ運動に参加する人数が増加したりすることにより、集団や社会の一員としての自覚と責任の一端を検証する。

３　道徳教育総合支援事業の研究課題との関わり

・学校の教育課題を踏まえた道徳教育の内容の重点化

③進んで人間関係をつくる力を育む道徳教育

④共感する力や思いやりの心、協力し合う態度を育て、集団や社会の一員としての自覚と責任を育む道徳教育

・道徳教育の計画的推進と道徳の時間の指導の創意工夫

⑧書いたり討論したりするなどの表現する機会の充実を図る指導の改善

⑨各教科等における道徳教育と道徳の時間との関連を図る指導の工夫

⑩特別活動等における実践活動や体験活動における道徳的実践の工夫

・指導体制や異校種、家庭・地域等との連携体制の充実

⑭道徳教育の推進を主に担当する教師を中心とした全校指導体制の在り方

⑮家庭や地域等との連携による一体的な推進の在り方

（４）具体的な取組の計画

１　道徳教育の全体計画の見直しと外部アドバイザーの招へい

本校がこれまで研究してきた、「自己存在感と自己決定の場の中で、共感的人間関係を基盤にして作用させることができれば、生徒のやる気が引き出され、自己指導能力が育成されること」に加えて、道徳の時間を要として、全教育活動を通じ「人とのかかわり」を焦点化した心の教育を推進するために、道徳教育の全体計画の見直しを行う。特に、教科や体験学習とのかかわりについて、学校全体の研究会の中で話し合いながら年間計画の見直しを図る。

また、本研究を推進するにあたり、下記の外部アドバイザーを招へいし研究の進め方等についてアドバイスを求める。

昭和女子大学大学院　教授　押谷由夫　先生
貝塚市教育委員会　　参事　川崎雅也　先生
滋賀県教育委員会　　主査　上田仁紀　先生
湖南市教育委員・詩人　　野呂　昶　先生

外部アドバイザーの助言により、生徒同士の好ましい人間関係や生徒と教師との信頼関係が確立された学級経営を確立し、道徳の時間を要として、全教育活動を通じ「人とのかかわり」を焦点化した心の教育を教科・領域等との組織的・計画的な関連を図りながら実践する研究を推し進める基盤とする。

２　研究部会による取り組み

研究を推進するために、校内推進委員会を設けたが、さらにその下部組織として研究部会(教頭､研究主任､各学年道徳担当)を設け、定期的に会議をもつ。会議は火曜３限とし、時間割に組み込んだ。議題は、各学年の道徳の授業計画の細かい見直し、各学年の取り組みの報告、校内研究会・研修会の企画等を行う。

本校では、これまでもさまざまな教育活動に、ゲストティーチャーをはじめ、地域の教育力を活用してきた。手話教室、車いすバスケットなどの授業に、要としての道徳の時間を設定するための話し合いを行う。

さらに、生徒を中心とした行事の運営、各教科の実践を道徳という視点から見直したり、各学年で使用する道徳の教材を統一したりするなどを検討する。また、ＩＣＴを活用したり、各フロアに道徳コーナーや今週の一言、生け花コーナーを設けたりするなど、道徳的風土づくりについても話し合う。その他、宿泊体験、環境学習、人権学習、職場体験、修学旅行など主要な体験学習に、関連する道徳の時間を計画に盛り込むなどする。

これにより、道徳の時間の充実を図り、多様な道徳教育用教材の選択・開発とその効果的な活用、特別活動における実践活動や体験活動などにおける道徳的実践や各教科等における道徳教育と道徳の時間との関連的な指導を工夫することができる。

３　校内研究会・研修会の開催

道徳教育推進教師を中心とした全校指導体制の在り方を見直し、指導体制や家庭・地域等との連携体制の充実をはかるためにはどうすればよいか、校内研究会や研修会を開催して全教職員で研究を推進する。

具体的には、最初の研究会で道徳教育の全体計画の見直しを行い、各教科の指導や体験的な学習と、道徳の授業との整合性を図る。全体計画の作成に全員がかかわることで、道徳の時間を要として学校の教育活動全体を通じて道徳教育を行うことができるようになる。各教科、総合的な学習、特別活動にも、それぞれの特質を生かした道徳教育を行わなければならない意識付けともなる。

自分の授業スタイルを打ち破ることは、なかなか難しいものである。そこで、外部から道徳の実践者を招き、師範授業を行う。これまで経験したことのない「発問」や「授業構成」で成り立つ授業を見ることで、新しい授業に挑戦する気概が生じる。

夏季休業中には、じっくりと資料分析の研修に取り組む。１日かけて、各授業研究部会が取り上げる道徳資料を読み込み、どのような授業展開ができるか、学年部ごとに考える。また、本校の「道徳風土づくり」、特にホームページの改定について検討する。

部会別協議の進め方

① 資料を読む…道徳上の問題を考えさせるのに必要な情報を取り出す読みをする。
・ストーリー　　・登場人物の心情
・生き方に関わっての道徳上の問題とその構図（場面わけ）

② 中心場面を決める
・主人公が変化するところ。　　・どのようなことを中心にして話し合うのかを考える。

③ 中心発問を決める
・主人公が道徳的に変化したのは【どうしてか？】の心を考えさせる。
・・・行動やことばの内にある心をつかむ

④ ③の子どもの心の動きを予想する 。
・できるだけたくさんの考えが出せるようにする。（それが中心発問である証拠）

⑤ ねらい、内容項目、主題を設定する 。
・中心発問で考えた内容に合う項目とねらいにする。

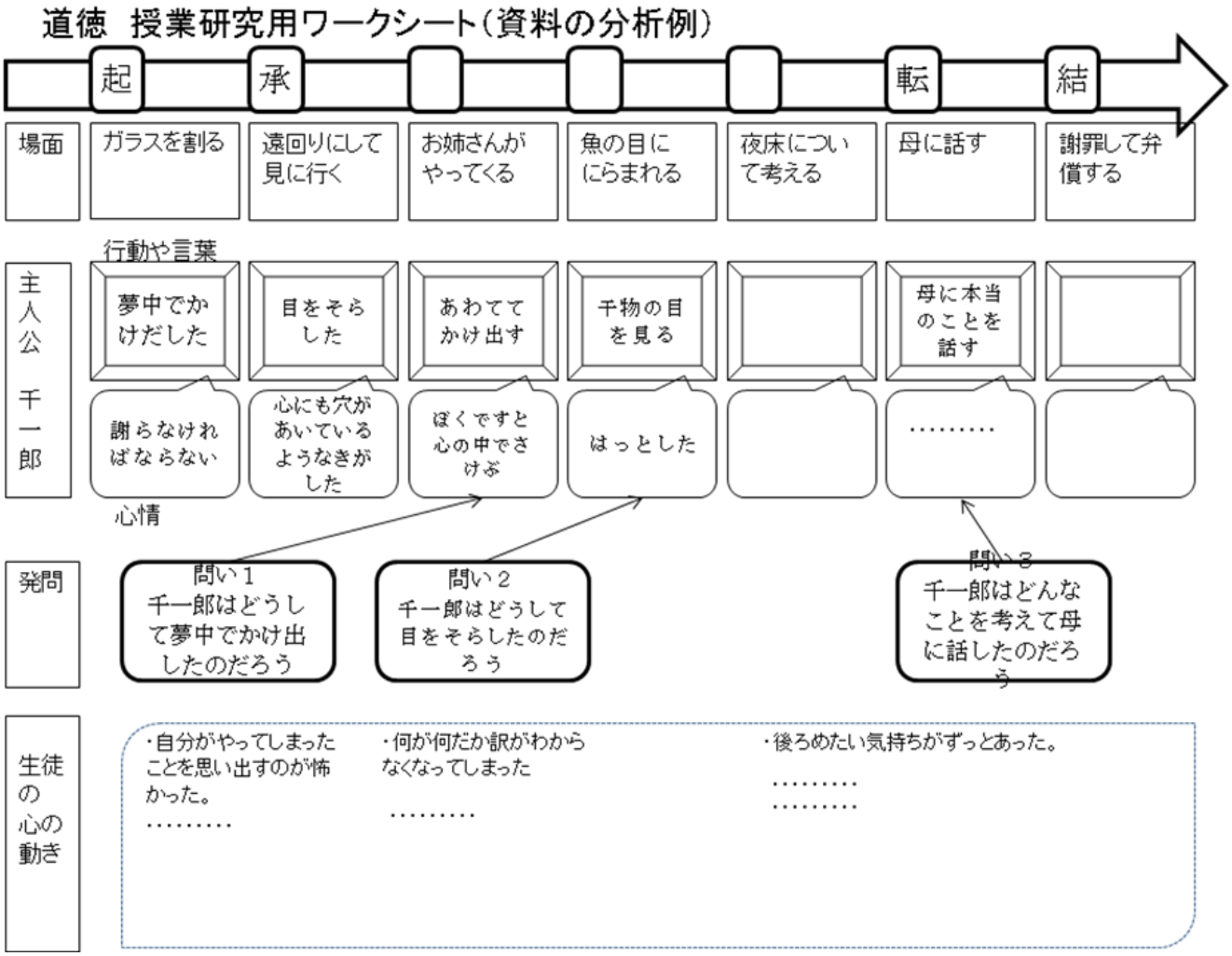
⑥ その他の発問（基本発問）を考える 。
・中心発問を生かすための前後の発問を考える。

≪基盤としての道徳性≫　道徳的心情　道徳的判断力　道徳的実践意欲・態度

⑦ 授業を効果的に展開するための手立て（板書計画を含む）を考える。

以上の手順を、下のワークシートに記入しながら話し合うワークショップ形式で行う。

押谷先生には、講話「道徳の授業を充実させ学校・学級を変えていこう」をお願いするほか、研究授業等の具体的内容について部会別に発表したものを講評いただく。



道徳資料の読み取りのためのワークシート（分析例）

4　道徳の時間の充実

道徳の時間は、学校の教育活動全体で行われる道徳教育を「補充、深化、統合」する時間であり、道徳的価値の自覚を深める時間である。いわば「考え合いによる道徳教育」の時間である。

本研究は、共感する力や思いやりの心、協力し合う態度を育て、集団や社会の一員としての自覚と責任をはぐくむ道徳教育の充実を図ることにより、豊かな心をもち、人とのかかわりを大切にして、これからの社会をたくましく歩む生徒を育成することが大きな目的である。そのためには、心の居場所として、生徒一人ひとりが安心して生活できる学級集団のなかで、「考え合う」ことによって、自分の見方や感じ方、考え方との共通点に自信をもったり、相違点に気付いたりすることで新たな見方や感じ方、考え方と出会い、自分の見方、感じ方、考え方を広げ、深めることができるところにある。本研究主題の「人とのかかわりを大切にして、豊かな心を育てる」とあるのは、まさにこのことも指しているのである。

体験によって学習するだけでは、自分の見方や感じ方、考え方を豊かにするものの、独りよがりに終わってしまう。それを補い、深め、様々な体験や経験を統合するのが、道徳の授業である。奈良県立教育研究所の島恒生氏は、道徳の時間は、「考え合い」に徹するとともに、次の３点を大切にすることで、充実が図れると述べている。

① 自分の見方、感じ方、考え方に目を向けられるようにすること。

② 自分以外の考え方に出会えるようにすること。

③ 自分の見方、感じ方、考え方との共通点や相違点が明確になること。

そこで、今年度は道徳の授業を充実させる手始めとして、道徳の実践計画と記録を持ち回りによって全職員（授業者）が行うこととする。授業の実施前に、中心発問、予想される生徒の答え、基本発問（中心発問のためにおさえるべきこと）、板書計画を計画しておき、各道徳の授業を実施することにした。

授業後には、授業者が「生徒が共感的に資料を読み取っていたか。」「生徒が積極的に発言していたか。」「他の生徒の発言をしっかり聞いていたか。」「多様な考え、中心発問に迫る考えが出たか。」の４観点で自己評価する。研究が進展するにつれて評価ポイントが向上することで、ねらいとする道徳的価値に迫れる授業が達成されたかを検証する手立てと考えた。

道徳実践の記録（授業者）

授業者		指導学級	年　　組	授業日	年　月　日
資料名		内容項目			

【授業までに】

中心発問 予想される生徒の答え	・ ・
基本発問	（中心発問のためにおさえるべきこと）
板書計画 （横書き記入）	

【授業後】

中心発問に対する実際の生徒の答え	・ ・ ・
評価（4=できた←→1=できなかった） ・生徒が共感的に資料を読み取っていたか。 ・生徒が積極的に発言していたか。 ・他の生徒の発言をしっかり聞いていたか。 ・多様な考え、中心発問に迫る考えが出たか。	 ４・３・２・１ ４・３・２・１ ４・３・２・１ ４・３・２・１
反省（良かった点、改善すべき点、疑問点など）	

5　先進地研修

道徳教育の研究について先進的に取り組まれている学校を訪問し、研究の内容や考え方などについて直接話を伺うことや、実際に授業を参観することは意義が大きい。特に「道徳教育実践研究事業」の推進校及び先進的 な取り組みをされている学校の実践事例を収集するにも、直接学校を訪問して、その学校の雰囲気なり、生徒の様子なりを見ておくのといないのでは、受け取る情報の意味が異なる場合もある。

本研究を開始するにあたって、昨年度末に淡路市立津名中学校（平成 20・21 年度文部科学省道徳教育実践研究指定校）と尾道市立久保中学校（平成２０・２１年度文部科学省道徳教育実践研究指定校）を訪問し、本研究に対する多大な示唆を得た。

本年度も、道徳教育の先進地研修を実施し、今後の研究を展開するにあたっての参考としたい。今年度は、なるべく多くの実践事例を収集するため、第４５回全日本中学校道徳教育研究大会香川大会に参加する計画を立てた。

【大会期日】

平成 23 年 10 月 20 日（木）から 21 日（金）

【会　　場】

高松市立山田中学校（高松市川島東町１２５７番地１　TEL:087-848-0071 ）他

【大会主題】

豊かな心を育て、ともに未来を切り拓く道徳教育

～豊かなかかわりの中で、自らを高めることのできる生徒の育成～

【主　　催】

全日本中学校道徳教育研究会　香川県中学校教育研究会道徳部会

6　体験活動の充実と地域との連携

豊かな心をはぐくむためには、学校、家庭、地域が十分連携を図りながら、子どもたちの豊かな人間性や社会性などをはぐくむ道徳の時間の充実とともに、各教科、特別活動、「総合的な学習の時間」それぞれの特質に応じて適切な指導を行い、学校の教育活動全体を通じて道徳教育を行うことが必要である。

特に、体験活動を生かした道徳教育の指導の工夫、地域の人々の積極的な参加や協力などの取組を促すなどの改善が必要である。

本校では、これまでもさまざまな教育活動に、ゲストティーチャーをはじめ、地域の教育力を活用してきた。ＰＴＡ主催による手話教室、人権学習と結びついた車いすバスケットの体験学習など地域の様々な人たちの強みを生かして、地域人材による取り組みを行ってきた。

また、生徒を中心とした行事である体育祭や文化祭、宿泊体験学習、環境学習、人権学習、職場体験学習、修学旅行など主要な体験学習にも、目を見はる取り組みは多い。これらの体験学習を道徳教育の全体計画を見直すことにより、道徳の時間との関連性を明確にして、学校教育全体の中で豊かな心を育成するようにしたい。

詩人で湖南市教育委員である野呂 昶（のろさかん）先生は、この事業に先行して取り組んでいる石部小学校において「ふるさと意識」を育てるための郷土資料を執筆いただいている。野呂先生は、道徳の授業にも積極的に関わっていきたいというお気持ちをもっておいでであるので、ぜひとも本校においても、ゲストティーチャーなどとして来ていただいたり、研究への助言を仰いだりしたいと考えている。

7　各教科との関連

各教科等の指導においては、それぞれの特質に応じて、道徳について適切に指導する必要がある。各教科等における道徳教育の指導においては、学習活動や学習態度への配慮、教師の態度や行動による感化とともに、各教科等それぞれの目標と道徳教育との関連を明確に意識しながら、適切な指導を行う必要がある。

校内研究会で、道徳教育の全体計画を見直す際に、各教科の指導と道徳の授業の整合性を図る。また、それぞれの教科の指導と道徳の指導内容がどのように関わっているかを教科ごとに再確認し、意識付けを図る。また、初任者研修など、本校で行われる研究授業では、すべて道徳との関連を意識した指導案を作成することとした。

８　道徳的風土づくり

昭和女子大学大学院教授の押谷由夫先生は、著書「心をこめた丁寧な道徳の授業と道徳的風土づくり」の中で、学校教育の大きな課題になっている「道徳心」の育成について、特に求められる重点課題を明らかにしておられる。一つは、原点に返って、一時間一時間の道徳の授業を丁寧に積み重ねること、二つめには、子どもたちの生活する場である学校や学級の風土を道徳的風土にしていくことを具体的実践に触れながら論述しておられる。

そこで、各フロアに道徳コーナーや今週の一言、生け花コーナーを設けたり、ＩＣＴを活用して研究の内容を発信したり、道徳的風土づくりについても取り組む。

本校では、以前から、地域のボランティアの方による生け花が昇降口に活けられてきた。このような取り組みの中にも、道徳の授業のヒントは隠されている。生徒が自分たちの地域のいろいろな人々に支えられていることに目を向け、心を通わせるきっかけになるだろう。また、全校集会の校長訓話などあらゆる機会に道徳的な風土づくりの工夫は可能である。

また、ＩＣＴを利用した道徳的風土づくりにも取り組みたい。今年度より学校のホームページに新しく「あすなろ」コーナーを設ける。このコーナーは、学校だけでなく、ご家庭や地域においても『子どもを育(はぐく)む』上でヒントになるような話題や内容を取り上げていく。ホームページは学校の教育活動を広く発信していく上で重要な方法である。

このように、学校全体の教育的風土を、生徒一人ひとりに目を向けて、生徒と心を通わせられるようなものにどんどん改善していきたい。しかしながら、生徒の学校生活の基盤は学級である。存在感と自己実現の喜びを味わうことのできる学級を創造して、生徒が安心して自分の力を発揮できるようにすることが必要である。生徒同士の望ましい人間関係や教師との信頼関係をはぐくみ、生徒一人ひとりが安心して生活できる学級の集団をつくることが道徳的風土づくりには不可欠である。心の居場所として、生徒一人ひとりが安心して生活できる学級集団をつくりこそ、道徳的風土づくりの中心的な課題となるだろう。

また、生徒会活動などにおいても、生徒会が自主的な参加を呼びかける「ちょボラ」（ちょっとしたボランティア）を実施したり、自主的なあいさつ運動を行ったりするなど、すべての生徒の活動に道徳的風土づくりの考え方を取り入れていくことが必要である。

その上で、道徳の時間を要として、全教育活動を通じ「人とのかかわり」に焦点化した心の教育を教科・領域等との組織的・計画的な関連を図りながら実践すれば、共感する力や思いやりの心、協力し合う態度を育て、集団や社会の一員としての自覚と責任をはぐくむことができると考える。

道徳教育は心の教育である。心が通わないと、どれだけ優れた教材研究や指導技術を身につけても効果的な道徳の授業はできない。逆に教材研究や指導技術が未熟であっても子どもたちとしっかり心を通わせていれば、十分な道徳の授業ができる。良い道徳の授業の基盤として、道徳的風土づくりを捉えていきたい。